

協働型教育実習を生かした主体的・対話的で深い学びの実践

山 内 誠 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

A Practical Research of Active Learning through a Collaborative Teaching Practicum

YAMAUCHI Makoto

キーワード：協働、主体的・対話的で深い学び、台北教育大実習生、遠隔教育

1. 研究の目的

本校では、2014年度より国立台北教育大学及び、鹿児島大学教育学部の教育実習生を同時期に受け入れ、協働型教育実習として学生間の協働的な「授業づくり」や教育実習後のタブレット端末を活用した「遠隔教育」の研究実践を行っている。本研究に当たっては、国立台北教育大学と学部間との学術交流協定文書においても相手方の同意、協力を得ており、来年度も国立台北教育大学教育実習生を受け入れ、協働型教育実習に取り組むこととなっている。さらに、2017年の新・学習指導要領（中学校外国語）告示に基づいて、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業の在り方を考察する。特に平成27年度に行った第65回全国英語教育研究大会（全英連大分大会）、第63回九州地区英語教育研究大会（大分大会）における研究実践発表と平成28年度に行った第64回九州地区英語教育研究大会（鹿児島大会）中学校壇上授業を中心にして、授業計画立案に至った経緯や実際の授業において取り組んだ内容、成果、さらに今後の課題などにも言及する実践的研究である。

2. 主題設定の理由

2.1. 社会の要請から

少子化、産業の空洞化などの問題が顕著に現われている現代社会において、グローバル化等、多様な価値観が広がる中、人々はその社会の当事者としての自覚をもち、一律の正解が存在しない諸問題の解決に取り組むことが求められている。そのような社会情勢を受け、人々の多様な個性・能力を基盤としながら、「自立・協働・創造に向けた一人一人の主体的な学び」を方針とした今後の計画が教育振興基本計画において示された。その中で、「新たな価値を創造する人材、グローバル人材等の養成」が謳われている。また、外国語能力の向上に関する検討会による「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」において、グローバル社会で求められる外国語能力とは以下のようなものであると示された。

- ・ グローバル社会で求められる外国語能力とは、異なる国や文化の人々と外国語をツールとして円滑にコミュニケーションを図ることができる能力

- ・ 円滑にコミュニケーションを図ることができる能力とは、例えば、異なる国や文化の人々と臆せず積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度や、相手の文化的・社会的背景を踏まえた上で、相手の意図や考えを的確に理解し、自らの考えに理由や根拠を付け加えて、論理的に説明したり、議論の中で反論したり相手を説得したりできる能力

円滑にコミュニケーションを図る際には、相手の意図や考えを瞬時に理解し、即興的なやりとりをしようとする態度が必要である。そのようなコミュニケーションが成立するための能力を育成するには、生徒自身が主体的に学習に参加したり、学んだりする力が求められる。そのような力を養うために、協働的な言語活動の後、自分の表現を振り返り、自分の改善点や必要な学習について主体的に考え、次の学びに繋げることができるような生徒を育成する必要があると考えた。

2.2. 円滑にコミュニケーションを図る能力の高まりについて

グローバル社会で求められるコミュニケーション能力とは、異なる国や文化の人々と、外国語をツールとして円滑にコミュニケーションを図ることができる能力である。（「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」文部科学省，2011）そのため、本校では、この「円滑にコミュニケーションを図ることができる能力」を高めることによって、「グローバル社会で活躍する生徒の育成」につなげていきたいと考えた。

具体的には、「円滑にコミュニケーションを図る能力」を以下のように定義付けた。

- ① 異なる国や文化の人々と、臆せず積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度
- ② 相手の文化的・社会的背景を踏まえた上で、相手の意図や考えを適切に理解することができる力
- ③ 自らの考えに理由や根拠を付け加えて、論理的に説明したり、議論の中で反論したり相手を説得したりすることができる力

「円滑にコミュニケーションを図る能力」と学習指導要領解説（2008）を照らし合わせてみると、「読むこと」と「聞くこと」に関しては、「初歩的な英語を聞いたり、読んだりして、話し手や聞き手の意向などを理解できるようにさせること」と明記されている。つまり、単に英語を表面的、機械的に理解する能力にとどまらず、より踏み込んだ能力を身に付けさせることが大切である。また、「話すこと」や「書くこと」においても、「与えられた語句や文を繰り返すことができるだけでなく、自分の考えを話させたり、書かせたりすること」と示されている。実際、本校でもこれらを踏まえて、理解から表現のように4技能の統合的な活用を意識した協働的な言語活動に取り組んできた。しかし、相手の話す内容に関して、質問したり、意見を述べたりする生徒が増え、コミュニケーションの継続に向けた積極的な態度が見られるようになった等の成果はあがったが、内容の深まりが見られなかった。また、Speakingの内容における表現の正確性を高める必要がある等の課題も残っている。また、学習目標の達成のために、自分の学習状況を客観的に把握したり、自分の課題を見いだしたりすることができない生

徒が多いことも分かった。

そこで、社会の情勢やこれまでの研究の課題、生徒の実態等を踏まえ、課題の解決に集団で協力しながら取り組ませ、「円滑にコミュニケーションを図る能力」を高める協働的な言語活動を設定した。その際、評価基準やモデルを効果的なタイミングで生徒に示したり、話し合ったりさせ、生徒が自分を振り返ったり、友達にアドバイスしたりしやすくなるような手立てをとった。そのことにより、量にこだわったコミュニケーションではなく、理解した理由や根拠を基に、論理的な説明をしたり、議論の中で反論や説得したりする活動が活性化し、質の向上につながり、円滑なコミュニケーション能力が更に高まっていくと考えた。

2.3. 主体的・対話的で深い学び（協働的な言語活動）について

本校では、「協働的な言語活動」を以下のように定義づけて実践研究してきた。目指すべき主体的・対話的で深い学びは、これまで本校で実践してきた「協働的な言語活動」と共通点が多いことが分かる。そこで、この「協働的な言語活動」の更なる充実を図るべく、国立台北教育大学教育実習生との遠隔教育の充実のための協働型教育実習の在り方について、研究実践を進めている。

本校では、協働の心理的側面における視点を、「二人以上の生徒がそれぞれの役割に責任を持って協力し合うこと」、いわゆる「責任感」と「協力心」といった言葉で表されるものと考えた。また、協働の行為的側面における視点については、「二人以上の生徒が互いに知識・技能や経験を補ったり、組み合わせたりすること」、いわば「補完」や「組合せ」といった言葉で表されるものであるとした。

これらの協働の視点を加えた言語活動を授業場面では次のように例示できる。まず、生徒同士が互いに協力しなければ、よりよい解決に至らない異なる国や文化の背景を踏まえた課題を設定する。生徒は、この課題を解決するという目的に向かって、グループで役割を分担し、それぞれがその分担された役割に対して責任感を持ち、情報を集めたり、解決策をまとめたりする。その後、それぞれが得た情報や解決策をグループ内に持ち寄り、互いの考えを尊重し合い、周囲とやりとりをしながら、多様な考えを補完し合ったり、組み合わせたりする。このように、互いに協力し合って、試行錯誤しながら、よりよい解決策を見出していく言語活動の活性化が、円滑なコミュニケーション能力をより確かなものに変容させていくと考えた。その際、理想の姿を示したり、留意すべき点を気付かせるための話し合いをさせたりし、自分たちの英文をより良いものにするために主体的に学ぼうとする手立てにより、学習者として、質の向上とより良い相互評価につながり、深い学びを追求するようになると考えた。

2.4. 主体的・対話的で深い学び（協働的な言語活動）をより活性化させるために

本校では、平成27年度から、協働的な言語活動を活性化させるための手段として、よりよい1つの考えを見いだすための合意形成を行なう活動を取り入れた。具体的には、個々の主体が自分の知識・技能や経験に基づく考えを他者に向けて外化（認知科学や教育心理学用語：自分の考

えを脳の中に閉じ込めたままにせず、文章や図表に表すこと)させ、それぞれが持つ多様で異なる考えを共有させ、一つのよりよい考えに、合意可能な地点を探り合うコミュニケーションを図らせることが必要である。その過程においては、相互に知識・技能や経験を活用しながら思考を練り上げ、修正し、発展させながら、よりよい方向に向かって、双方が歩み寄ることが求められる。

他者に向かって表出される、つまり、日本語や英語を使って外化される個人の考えは、それぞれの知識・技能や経験に基づいた多様なものである。よって、相手の考えをすぐには理解することができない場合において、相手の考えをより深く理解しようと自らの知識・技能や経験の中で同じようなものはないかと考え、互いに話し合えば、協働的な言語活動は活性化し、生徒間における双方向的で、主体的な学びがえられる。そうすることによって、それぞれの知識・技能や経験が共有され、関連付けられて、一つのよりよい考えとしてまとめられ合意に至る。その際、コミュニケーションを英語で行えば、他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えに加え、英語の知識・技能をも広げ深めるため、その学びはより深いものになると考えた。

3. 主体的・対話的で深い学びを実現するための協働的な言語活動の実践例

3.1. 目的

「目的や場面、状況など」は、外国語を適切に使用するために必要不可欠である。ある情報を精査する際には、単に一つの情報をうのみにするのではなく、他の情報と比べる必要がある。また、意見を述べる際には、考えを整理したり話す内容の構成を考えたり、相手に応じた表現を選択したりする。このように、「目的や場面、状況など」に応じた言語の運用を考えることで、「思考力、判断力、表現力等」の育成を目的とする。(中学校学習指導要領解説 H29年7月)

3.2. 主体的・対話的で深い学びを実現するための協働的な言語活動とは

平成25年度から受入を行っている台北教育大学実習生の意向に関する情報収集のための分担を行う。また、分担する情報の獲得のさせ方として①メール文②ビデオレター③インターネット電話を用いた質問④教科担任の観光地紹介に対する思いの4種を準備する。生徒は、それぞれの情報の解釈をエキスパートグループの中で協力して行い、自分なりにメモ(キーワードで)する。その後、持ち寄った情報のキーワードを示しながら自分の言葉で再構成し伝え合う。互いの情報を比較したり、組み合わせたりしながら、観光地紹介文を改善させることで、他者の意向を捉えたよりよい観光地紹介を創造させる。

情報①：ビデオレター「国立台北教育大学実習生からの動画(聞く・書く)」

情報②：e-mail「同実習生からのe-mail(読む・書く)」

情報③：インターネット電話「同実習生とのテレビ電話(話す・聞く・書く)」

情報④：鹿児島大学教育学部実習生との電話「揺さぶりアドバイス(話す・聞く・書く)」

3.3. 活用方法

(1) 台北教育大実習生からのビデオレター (Listening → Writing)

英語が苦手な生徒にとっても、紹介動画が繰り返されることによって内容理解が深まった。また、生徒は実習生のメッセージだけでなく、表情や音調から、お勧めの観光地に必要な情報を推測している様子も伺えた。得られた情報をメモさせるために用いた付箋紙は、生徒の要約やホームグループで表現（再構成）する際のヒントとなるものであった。実際、教師の内容理解に対する質問に対しても正確に答えることができ、ホームグループでも実習生の発話モデルとキーワードを基に自信を持って説明していた。

(2) 台北教育大実習生からの e-mail (Reading → Writing)

生徒は、相手の意向を捉えようと、英文の読解をチームで主体的に進めていた。特に、実習生とのお別れ会でプレゼントした曲が好きであるという情報については傾聴する姿が見られ、その後の観光地紹介でも BGM として活用するなどの姿が見られた。また、季節に関する質問については、どのチームも合意形成を図る知的コミュニケーションの中心的な話題となっており、メモを基に活発な対話がなされていた。このことから、合意形成を図るための試行錯誤を促した e-mail が「相手意識」を高めるための課題文として、有効な手立てとなっていたと考えられる。

(3) 台北教育大実習生とのインターネット電話 (Speaking / Listening → Writing)

同実習生にとって、よりよい観光地紹介となるために必要な情報をインターネット電話を活用して、即興的に引き出させた。英語が得意な生徒が中心となって、取り組んだこともあり、協力し合いながら対話を行うことができた。一方、実践的であるがゆえに、単なる一問一答ではなく、自然な対話に発展することに戸惑う場面も見られた。しかし、実際の活用場面の設定は、生徒のコミュニケーションに対する意欲を高めるには十分であり、国際的な視野を広げさせるための ICT の活用として、今後の授業展開の可能性を得られるものであった。実際、e-mail などから得られた情報を更に広げようと、再度インターネット電話で質問することを求める積極的な姿も見られた。

(4) 鹿児島大学教育学部実習生との電話 (Speaking / Listening → Writing)

「相手意識」をより高めさせるために、同実習生と一緒に教育実習を受けた鹿児島大学教育学部実習生のアドバイスを基に、他の台北教育大実習生の気持ちを傾聴させた。本時のタスクは、同実習生のためのよりよい観光地紹介であったが、他の実習生が同実習生をうらやまないだろうかと揺さぶりを行ってもらった。結果、生徒の観光地紹介は、2 名の実習生にもよろしく伝えてくださいといった言葉が添えられたことから、様々な人々に傾聴しながら、相手意識が高まったと考えられる。

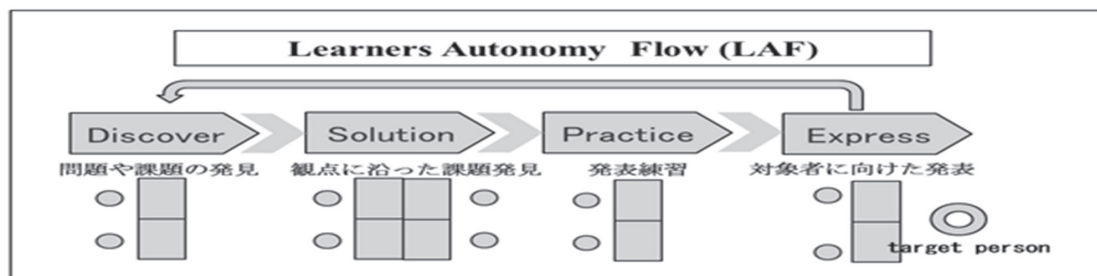
4. 主体的・対話的で深い学びを実現するための LAF モデルを活用した実践例

4.1. 目的

「LAF」を用いることにより、自己課題設定に必要な「インプット」「プロセス」「アウトプット」の3つの段階を絶えず繰り返すことができるので、large task に向かうためのよりよい自己課題設定が可能になると考える。つまり、主体的で深い学びを実現する能動的な学習者の育成を図るべく、単元を通して理想と現状の間にある問題を見出し、自己課題を持ち続けながら学習に取り組ませることを目的とする。

4.2. 単元導入時に用いた自己課題を設定させるための LAF とは

具体的には、まず、対象者に向けた発表を通して生じた問題を把握する（「インプット」の段階）。次に、生じた問題について、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」「外国語表現の能力」「外国語理解の能力」「言語や文化についての知識・理解」の4つの視点から捉え、論理的に思考したり、発想転換を行ったりして課題を発見する（「プロセス」の段階）。さらに問題を基にした課題の解決を図るための練習を行った後（「アウトプット」の段階）、再び発表する。それでも解決に至らない問題を、本単元を通して解決すべき問題と捉え、その問題の解決に向けての手立てを自己課題として設定していく。



【Learners Autonomy Flow (LAF) のイメージ】

4.3. 活用方法

(1) 国立台北教育大実習生とインターネット電話を介した LAF モデルの活用

実際の授業においては、単元の1限目に、インターネット電話を介して、既習の言語材料を活用しながら宿題として作成した原稿を用いて、台北教育大学生に映画紹介を行った。うまく伝わらない要因を把握する「インプット」段階では、生徒の多くが、「発音や英文の正確性の問題」や「映画の内容に関する情報量の少なさ」、「相手の質問に即興的に応じることができないこと」等を「問題」として挙げていた。「プロセス」の段階では、「問題」の解決を図るために辞書や参考書で発音や文法を確認したり、相手の質問に適切に応じるための原稿修正や音読練習等を行ったりしていた。

2回目の紹介場面では、1回目と比較して、生徒が自信を持って表現する様子が見られたり、また、相手の質問に適切に応じることができたり、相手の共感的な理解を得られたりし

たことから、伝わった喜びを実感している様子が見られた。「LAF」学習を通して、生徒の主体的な学習態度が高まり、単元を通して意欲的に学びに向かうための自己課題を持たせるだけでなく、今後の学習を通して large task をよりよく解決することでできそうだという自己効力感を与えることにもつながると考えられる。

(2) LAF モデルと単元構成シートを組み合わせた活用

導入時に示した単元構成シートを、各 small task において、生徒の言葉に置き換えさせながらその共有化を図り、何ができるようになるればよいのかといった理想の姿を持たせる工夫を行った。理想の姿の示し方については、教師が教科書本文を基本としながら、生徒に活用させたい表現を用いて、モデルスピーチ等を示したり、ALT との連携を図りながら、完成例を映像として示し、それらに含まれるポイントに気付かせたり、TED などの動画を活用してプレゼンテーションの工夫などに気付かせたりする。そのことにより、生徒はより具体的に「できるようになること」を理解することができ、自身の自己課題を明確にし、主体的で深い学びにつなげるための見方・考え方を明らかにできると期待できる。しかし、理想の姿を見いだすことは難しく、何をもって良いとするかを考える必要があり、教師自身が高い意識を持って、英語と向き合ったり、教科書題材の分析を深く行ったりする必要がある。つまり、設定する理想の姿が高まらなければ、生徒がそれ以上に伸びる可能性は低くなってしまふといった意識を教師自身が持つ必要がある。

実際、単元構成シート等で理想の姿を明確にさせた後、middle task において再度「LAF」学習を行わせたところ、「相手の問いかけから対話を展開させていくためには、Yes/No だけで終わらない応答ができるようになる必要がある。」等、middle task における LAF 学習では、より生徒の発言に広がりや深まりが見られた。つまり、「LAF」学習を複数回設定することや理想の姿として単元構成シートを用いてできるようになるべきことが共通理解されることがよりよい表現へとつながり、生徒同士のアドバイスへも影響が大きいことから、単元レベルでのカリキュラム・マネジメントは、今後の指導において重要であると考えられる。

Unit 7 My Favorite Movie		large task I / C = (I + C) / E = (I + C + E)			
題材	時間	I 何とかなって映画を紹介しようとしている。	C 相手の紹介文を相手の声の特徴に注意しながら読むことができる。	E 相手の映画の紹介文の内容を適切に理解することができる。	F 自分の映画の紹介文の書き方を理解している。
著名な映画やアニメーションを取り上げ、それについてのベッキーと一郎が対話をしたり、また、映画E.T.のあらすじが紹介されていたりしている。 ○ タスク ・ 学習活動	1	<input type="checkbox"/> 相手の紹介文に相手登場人物の感情や自分の意見や考えを加えることができる。 <input type="checkbox"/> 映画の紹介文を暗唱することができる。	<input type="checkbox"/> 相手の紹介文に相手の感情や自分の意見や考えを加えることができる。 <input type="checkbox"/> 相手の紹介文に相手の感情や自分の意見や考えを加えることができる。	<input type="checkbox"/> 相手の映画の紹介文の内容を適切に理解することができる。 <input type="checkbox"/> 相手の映画の紹介文の内容を適切に理解することができる。	<input type="checkbox"/> 相手の映画の紹介文の書き方を理解している。 <input type="checkbox"/> 映画の紹介文に必要なUnit 7の言語材料（単語や文法等）を適切に活用している。
	2	<input type="checkbox"/> 映画の紹介文を作成するために、映画の内容を読み返し、視覚的に直したっている。	<input type="checkbox"/> 映画の紹介文に相手の感情や自分の意見や考えを加えることができる。 <input type="checkbox"/> 映画の紹介文に相手の感情や自分の意見や考えを加えることができる。	<input type="checkbox"/> 相手の映画の紹介文の内容を適切に理解することができる。 <input type="checkbox"/> 相手の映画の紹介文の内容を適切に理解することができる。	<input type="checkbox"/> 相手の映画の紹介文の書き方を理解している。 <input type="checkbox"/> 映画の紹介文に必要なUnit 7の言語材料（単語や文法等）を適切に活用している。
		自己課題			
○ [large task 1] お気に入りの映画を紹介しよう。 ・ large task の設定と単元のあらましをつかむ。 ・ 映画紹介文の作成と自己課題のリストアップ					
○ [small task] ・ 自己課題を把握し、理想の姿を見つける。					

【単元構成シート】

5. 主体的・対話的で深い学びをさせるためのカリキュラム・マネジメントの実践例

5.1. 目的

外国語の背景にある文化に対する理解を深めるべく、「聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら」コミュニケーションを図る必要があり、その一つとして相手の外国語の文化的背景によって「配慮」の仕方も異なってくる。また、外国語の学習やその他においても他者を配慮し受け入れる寛容の精神や平和・国際貢献などの精神を獲得し、多面的思考ができる人材を育成することを目的とする。(中学校学習指導要領解説より H29年7月)

5.2. 主体的で深い学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントとは

平成25年度から受入を行っている台北教育大実習生の来校にともない、全校朝会をGT(グローバルタイム)と位置付け、2年生の英語教科連絡員を中心にAll Englishでの全校朝会を実施している。また、GTの開催される火曜日をAll English Dayと位置付け、本校の2年生を対象に、朝の会、休み時間、昼食時間、帰りの会をAll Englishで活動している。さらに、All Englishでの学年集会や生活記録への英語での記入も積極的に実施している。

総合的な学習の時間においても、台北教育大実習生の受入を基に、1年次には鹿児島・台湾追究学習として「アジア・フレンドシップ・プロジェクト」に取り組み、2年次には「見つよう！日本の魅力」と題し、世界から見た日本の追究学習に取り組み、そして3年次には、世界に発信する探究学習に取り組んでおり、教科横断的な視点を生かしながら、生涯にわたって継続して外国語学習に取り組もうとするといった態度を養おうとカリキュラム・マネジメントを行っている。

5.3. 活用方法

(1) GT(グローバルタイム)

<p>ねらい GTにおける活動を通して、以下の様な観点からグローバル社会で活躍する生徒を育成する。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) GTにおける活動を通して、世界で起きている諸問題について、自分たちで生徒自身に関わる課題を見出し、解決していこうとする態度や意欲を養う。 (2) GTにおける活動を通して、互いの個性やよさを認め合いながら自己を発揮し合う、国際社会においても求められる望ましい人間関係の形成を促す。 (3) GTにおける活動を通して、外国の文化や言語に関する興味や関心をもたせ、またそれらに対する理解を促すとともに、各教科と国際社会との繋がりについて気付かせる。 (4) GTの企画・立案を自主的、計画的に行わせることによって、世界規模で物事を考えながら学校全体の生徒会活動に関わるようなリーダーの育成を図る。 (5) 行事や学年・学級での課題に関連した活動を行うことによって、各行事における取り組み内容の充実や、学年・学級における集団生活上の諸問題の解決を図る。

(2) All English Day

火曜日をAll English Dayと位置付け、GTの事後活動として、学年で取組を始めた。しかし、伝えたい英語が出てこなかったり、日本語を無意識に使ってしまったりといった課題が次々と上がり、本当にこの活動が意味があるのかといった議論が繰り返された。実際、All English Dayの目的等に関しては、学年集会等でも繰り返し議論し、生徒たちなりの目的や

ルールを設定させることで、主体的な取組に変わり、改善を図った。

具体的には、時間の限定と英語で伝えたかったけれど伝えられなかった言葉を付箋紙に書き出すといったものである。そこで、フロアの教室前にホワイトボードを設置し、付箋を貼り付けられるように支援した。また、可能な限り生徒が英語を使用する時間帯はALTにもフロアに上がってもらうなどして必然性を高めた。また、帰りの会等の進行マニュアルを英語で作成する生徒も見られた。

英語科としては、教科連絡員と連携し、付箋紙の中から、日々のスプリング帳に英作文の課題として帰りの会に数枚ずつ提示させ、授業で指導を行っている。学校生活の中で実際に使いたい言語が「話し言葉として」書かれたものを既習の言語材料を用いて、英訳するため、複数の答えも存在し、英語での表現の楽しさを授業の枠を越えて味わうことにつながっている。当然ながら、教師の英語力向上の時間にもなっている。

(3) 英語学年集会

本校では、月に1回、学年の代議員（10名）を中心に企画・立案される学年の課題や行事の事前活動の一環として生徒主体の学年集会が実施される。本集会においては、9月に1ヶ月教育実習生として来校する台北教育大教育実習生への「配慮」として、附属中の学校文化やルール、クラス紹介を学級ごとに、インターネット電話を活用して「発表」させ、その後台北教育大からの質問や応答「やりとり」を即興的に行わせた。自己紹介や学校紹介、ルールなどの伝達に関しては、既に授業の中でもタスクとして取り組んできたことであったため、準備にはそれほどの時間を要さなかったが、実際に発表ややりとりをする中においては、正確な発音に関して、大きな課題があることを実感することができた。また、活動後は200人全員に週末課題として手紙を書かせ、夏休み前に実際に台北教育大へ郵送した。不安な中、鹿児島での1ヶ月生活を送る実習生への配慮や理解を深くさせることで、学年での現在の取組がどのような意味を持つのかを実感させることにつながると期待している。

6. 成果と課題

国立台北教育大学及び、鹿児島大学教育学部の教育実習生を同時期に受け入れ、協働型教育実習として学生間の協働的な「授業づくり」や教育実習後のタブレット端末を活用した「遠隔教育」の研究実践を行っていることに対する成果と課題を述べる。

6.1. 成果

- ・ 新学習指導要領における主体的・対話的で深い学びの実現に向けた、知識及び技能、思考力、判断力、表現力、学びに向かう力や人間性の育成に欠かせない英語科におけるコミュニケーションの対象・目的等の大きな存在として台北教育大実習生や鹿児島大学実習生が存在しており、生徒の学びの大きな動機付けの役割を果たしている。

- ・ 異文化理解や他者理解などグローバル人材の育成に欠かせない人間性等の育成の機会となっており、英語の知識及び技能の獲得が様々な教育活動の手段となっている。
- ・ 本校の授業スタイルを学び、生徒の実態を把握した台北教育実習生がタブレット端末等を活用して、実習後もタスク設定の目的や対象となり、遠隔教育を進めている。
- ・ 台北教育実習生の教育文化を生かしたクラスルームイングリッシュや授業展開、言語活動からヒントを得ながら、よりよい授業改善につなげられている。
- ・ 学生同士の英語を使つての学び合いや授業づくり、特にTeam Teachingに関しては、将来のALTとの授業づくりの大きなヒントとなっている。また、英語力のスキルアップにもつなげる貴重な期間となっている。

6.2. 課題

- ・ 協働型教育実習により、心理的にも行為的にも互いの良さを補完したり、組み合わせたりしながら、よりよい授業改善を図っているが、指導時間の十分な確保が困難な状況にあり、受入人数や更なる教育実習の在り方について考える必要がある。
- ・ 遠隔教育の推進にあたって、タブレット端末等の十分な設備投資を進める必要がある。
- ・ 本研究実践の県内の中学校への汎用性を考え、単元構成の改善や目標の一致を図ることで、遠隔教育の可能性を広げながら、協働的な言語活動を進める必要がある。

7. 参考文献

- ・ 外国語能力の向上に関する検討会『国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体策』（2011）
- ・ 鹿大附属中「自己を発揮し、未来を拓く生徒の育成」研究冊子（2008-2012）
- ・ 鹿児島大学教育学部附属中学校平成25年度研究冊子『自己を発揮し、未来を拓く生徒の育成』
- ・ 樋口晶彦、島谷浩（編）『21世紀の英語科教育』開隆堂（2007）
- ・ 文部科学省『中学校学習指導要領』（2008）（2017）
- ・ 文部科学省『中学校学習指導要領解説外国語編』（2008）（2017）
- ・ 文部科学省『グローバル人材の育成について』（2012）
- ・ 文部科学省『教育振興基本計画』（2013）